
てるてる坊主とゾンビ

雨水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てるてる坊主とゾンビ

【Nコード】

N87760

【作者名】

雨水

【あらすじ】

ゾンビは何を求め何を夢見るのか、そんなゾンビの物語。

透き通るほど青い空、昨日までの雨が嘘のように晴れた軒下にてるてる坊主がつるされてる。一人の少女が窓のカーテンレールにつるされているそれを取り外し、のつぺらぼうな顔を満足そうに眺めながら彼女は微笑む。油性のサインペンを手にてるてる坊主の顔へ目と口を書いてから元気よく自転車に乗って家の近くにある橋まで行く、川は昨日まで降っていた雨のせいで増水していた。少女は少しためらいながらも、てるてる坊主を川に流し両手を合わせて祈る。

「ありがとう」

てるてる坊主は、感謝の言葉と祈りを全身に受けながら川に流されそしていく。少女の願いどおりに晴天を呼ぶことができたてるてる坊主は満足しているようだ。てるてる坊主は流れにのりながらこれからどうなるだろう、川底に沈むのかそれとも何処かに打ち上げられ自然に帰るか、そんなところだろう。

祈晴の神てるてる坊主は流されながら青い空を見る。

自分がなぜここにいるのか思い出そうとする。自分はいちど死に、何かの力によって生き返りそして命令されるままに何かをさせられていた。

その生活の中で自分を嫌悪し命令するものを憎悪した。飢餓と乾

きが自分の中で大きくなるにつれ世界を呪いこの苦痛と苦悩を他者へ撒き散らしたい衝動を押し殺しながら願いつつ、気がついたときには生きる者を憎み、血肉を求め腐敗する屍人の群れを率いていた。それだけ強かった激情も長い長い時間の中でいつの間にか風化していた。自分ひとり群れから離れ、それからは人目に触れないように世界を放浪していた。人がだんだんと増えはじめ隠れながら旅をすることが難しくなってきたときに使われていない古びた納屋を偶然みつけた。そこをねぐらにして引きこもった、もう外には出たかない。

すでに時間の感覚は無く、何もせず死体らしくしていた。あるとき納屋の壁に隙間ができていた。そこからは近くの質素だけどよく手入れされた家に住む家族の生活を見ることができた、自分はその家族の生活を貪るように観察し続けた。しばらくして彼らは自分とはまったく違う正反対な存在だと言うことを理解してしまった。

「血の通った美しい肌」

「輝くような瞳」

「太陽のように輝く笑顔」

「親愛と絆によって結ばれた仲間や家族」

なによりそこには生命の美しさが、力強さがあつた。

「どれも自分には無いものだ……」

夜、人に見つかるかもしれないという恐怖を押しさえ込み、なげなしの勇気を振り絞って家族達の住む家の敷地内まで近づく。窓から零れ落ちる暖かい光や笑い声を聞きながら自分は彼らの前に姿を見せそして受け入れられることを夢想した。しかし、それを願う自分の姿が窓ガラスに映るとあまりにも非情な現実に絶望し、何もできないままに納屋へと帰る……そんな希望と絶望を繰り返す生活を毎日つづけていた。

雨が何日も続き体にカビが生え始めてきたある日、少女が何か白いものを窓の内側につるしている姿を見た。人形だろうか？少女はその白い人形に何かを語りかけている、自分には決して向けられることの無い優しい言葉、自分があの人形になればどれほど幸せになれるだろうか？どれほどの喜びにつつまれるだろうか？でも、それは望むことができない夢。

少女が白い人形をつるした次の日、とてもいい天気になった。自分分は人に見つからないように川にまで出かけ、全身に生えた緑色のカビに陽光を当てていた、ふと人の気配を感じ近くの草むらへ隠れる、よくみると橋の上にあの少女がいた。何かをつぶやいた瞬間少女の手から白い人形が濁流の中へ落ちてしまう、少女は両手を口元に持っていき手のひらを合わせている。

あの白い人形は少女にとってとても大事なものだだろう、よほどシヨックだったに違いない。あの行動はこの国の人々が神に祈りを捧げ命乞いをする時にするものだ。過去、自分が行ったおぞましい行為を思い出す。そう、そのときこの国の人々はそうやって助けを求め哀願した。

今、少女の側には力になれる人間はいない、いるのは自分だけだ。あの白い人形をとってくることができたら彼女は喜ぶに違いない、もしかしたら優しい言葉をかけてくれて隣人となることを認めてくれるかもしれない。

そう思った次の瞬間、自分は川の中へ飛び込んでいた。

濁流に飲まれ口や肺の中はすぐに水でいっぱいになる、沈み始める体が岩や流木に容赦なく叩きつけられる。自分は必死に白い人形を追う、流されていく白い人形を少女に渡す事ができれば、自分はあの家族と同じ世界の住人になれると信じて……。

(後書き)

フジシン様よりリクエスト「ゾンビノ思考を物語へ」を頂きまして
イロイロと悩んだ末に書いたのがコレです。

ラストハザードとかバタリアン リターンズとか思いついたのです
が、挫折

なんとなくフランケンシュタインの化け物みたいな話になってます
ね。

ゾンビが大好きなんですが、愛がまだ足りないみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8776o/>

てるてる坊主とゾンビ

2010年11月14日02時29分発行